**〔解　　説〕**

寛延元年(一七四八)八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛(しょうらく)・並木千柳(なみきせんりゅう)の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。

　元禄十四年（一七○一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治(えんや)判官、吉良上野介を高師直(もろのお)、大石内蔵助を大星由良助(ゆらのすけ)などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあります。

　本筋の義士劇の他に、若狭助、本蔵、勘平、天河屋(あまかわや)の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えています。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲です。

**〔あらすじ〕**

**《大　序》**

暦応元年(一三三八)二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることとなります。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分けます。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭助は、兜を宝蔵に納めに行きます。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説きますが、戻ってきた若狭助の機転により、顔世はその場を逃れることができました。怒った師直は若狭助を罵倒、若狭助はかろうじて憤りを抑えます。

**《二段目》**

塩冶判官の国家老・大星由良助の子息である力弥は、明日の登城時間を知らせる使者として桃井家へやってきます。家老・加古川本蔵の娘・小浪が受け取りに出ますが、許嫁である力弥に見とれてしまいます。そこへ若狭助が出てきて口上を受け取り、力弥は帰って行きます。

桃井家の奥座敷。若狭助は、本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だと打ち明けます。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べます。

**《三段目》**

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結び、師直の勧めで共に門内に入ります。

**〔文使いの段〕**やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。さらに、腰元おかるが顔世から師直への文箱を届けに来ます。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奧に入ります。お軽に横恋慕する鷺坂伴内がやってきておかるをくどきますが、戻ってきた勘平に追い払われ、おかると勘平は二人きりの時を過ごします。

〔殿中刃傷の段〕「おのれ師直、真二つ」と意気ごむ若狭助の前に現れた師直は、前日とは打って変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができません。判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言います。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまいます。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵でした。

**〔裏門の段〕**館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動転します。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとしますが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆきます。

**《四段目》**

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来ます。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良助が駆けつけます。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶えます。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡します。

**《五段目》**

山崎で猟師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れます。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺されます。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫きます。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間でした。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追います。

**《六段目》**

**〔身売りの段〕**勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていました。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶します。おかるは別れを惜しんで連れて行かれます。

**〔勘平腹切の段〕**そこへ猟人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできました。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々と尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出てきます。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣きます。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来ました。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えます。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語ります。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかります。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶えます。

**《七段目》一力茶屋の段**

　大星由良助は祇園の一力で遊蕩に耽っていました。血気の若侍が煽っても、足軽の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれています。そこへ由良助の息子・力弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来ます。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からはおかるが盗み読んでいました。由良助はそれに気づき、おかるの身請け話を決めます。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話を聞くうちに由良助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとします。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良助が現れ、平右衛門には供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

　　　　　　　　　　　　　(一般社団法人　義太夫協会発行)

**《三段目》文使いの段**

御門に入りにける。

ほどもあらさず入り来るは塩谷判官高定。これも家来を残し置き、乗物道に立てさせ、譜代の侍早野勘平、朽葉小紋のさら袴ざわ〳〵ざわつく御門前。

「塩谷判官高定登城なり」

とおとなひける。門番まかり出で

「さきほど桃井様御登城遊ばされ御尋ね。只今また師直様御越しにて御尋ね。はや御入り」

と相述ぶる。

「ナニ勘平。もはや皆々御入りとや。遅なはりし、残念」と勘平一人御供にて御前へこそは急ぎ行く。奥の御殿は御馳走の、地謡の声播磨潟

〽高砂の浦に着きにけり〳〵

謡ふ声々門外へ、風が持て来る柳蔭。その柳より風俗は、負けぬ所定の十八九、松の緑の細眉も、堅い屋敷に物馴れし、奇特帽子の後帯。供の奴が提灯は、塩谷が家の紋所。御門前に立休らひ

「コレ奴殿。やがてもう夜も明ける。こなた衆は門内へは叶わはぬ。こゝから去んで休んでや」

と、詞に従ひ

「ナイ〳〵」

と、供の下部は帰りける。内を覗いて

「勘平殿はなにしてぞ。どうぞ逢ひたい用がある」

と、見廻す折から、後影、ちらと見付け

「おかるぢやないか」

「勘平様逢ひたかつたに、ようこそ〳〵」

「ムヽ合点のゆかぬ夜中といひ、供をも連れず只一人」

「さいなア、こゝまで送りし供の奴は先へ帰した、私一人残りしは、奥様からのお使ひ。どうぞ勘平に逢うてこの文箱。判官様のお手に渡し、御慮外ながらこの返歌を御前のお手から直ぐに師直様へ、お渡しなされ下さりませと伝へよ。しかしお取込の中、間違ふまいものでなし。マア今宵はよしにせうとのお詞。わたしはお前に逢ひたい望み、なんのこの歌の一首や二首。お届けなさるゝほどの間のないことはあるまいと、つい一走りに走って来た、アヽしんどや」

と吐息つく。

「しからばこの文箱。旦那の手から師直様に渡せばよいぢやまで。どりや渡して来う待つてゐい」

という中に門内より

「勘平〳〵〳〵判官様が召しまする。勘平〳〵」

「ハイ〳〵〳〵只今それへ。エヽ忙しない」

と袖振切つて行く後へ、どぜう踏む足付き鷺坂伴内

「おかぼう〳〵、コレおかぼう。ハヽヽヽヽなんとおかる。恋の知恵はまた格別。勘平めとせゝくつてゐるところを、勘平〳〵旦那がお召しと呼んだはきついか〳〵きついか。ハヽヽ師直様がそもじに頼みたいことがあると仰しやる。我らはそさまにたつた一度。君よ〳〵」

と抱付くを、突飛ばし

「コレ猥らなことを遊ばすな。式作法のお家にいながら狼藉千万。あた不作法なあた不行儀」

と、突退くれば

「それはつれない。暗がり紛れについちよこ〳〵」

と、手を取り争ふその中に

「伴内様〳〵。師直様の急御用。伴内様〳〵」

と、奴二人がうろうろ目玉で

「これはしたり伴内様。最前から師直様が御尋ね、式作法のお家にゐながら、女を捕へあた不行儀な、あた不作法」

と、下部が口々。

「エヽ同じやうになにぬかす」

と、面ふくらして連立ち行く。勘平後へ入替り

「なんと今の働き見たか。伴内めが一杯喰うて失せをつた。俺が来て旦那が呼ばしやると言ふと、おけ古いとぬかすが面倒さに奴共に酒飲ませ、古いと言はさぬこの方便。まんまと首尾は仕おほせた」

「サアその首尾ついでにな、ちよつと〳〵」

と手を取れば

「ハテ扨はづんだマア待ちやいの」

「なに言はんすやら、なんの待つことがあろぞいなア。もうやがて夜が明けるわいな。是非に〳〵」

是非なくも、下地は好きなり御意は善し

「それでもこゝは人出入り」

奥は謡の声高砂

〽松根に倚つて腰をすれば

「アノ謡で思ひ付いた。イザ腰掛けで」

と手を引合ひ、打ちつれてこそ**《三段目》裏門の段**

立騒ぐ

表御門裏御門、両方打つたる舘の騒動提灯ひらめく大騒ぎ。早野勘平うろ〳〵走り帰つて裏御門、砕けよれよと打叩き

「塩谷判官の御内早野勘平、主人の安否心もとなし。こゝ開けてたべ早く〳〵」

と、呼ばはつたり。門内よりも声高々

「御用あらば表へ廻れ、こゝは裏門」

「なるほど裏門合点。表御門は家中の大勢早馬にて寄り付かれず、喧嘩の様子は何と〳〵」

「ホヽウ喧嘩の次第相済んだ。出頭の師直様へ慮外致せし科によつて、塩谷判官は閉門仰せ付けられ、にてたつた今帰られし」

と、聞くより

「ハア南無三宝、お屋敷へ」

と、走りかゝつて

「イヤ〳〵〳〵閉門ならば舘へはなほ帰られじ」

と、行きつ戻りつ思案最中。腰元おかる道にてはぐれ

「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何とせうどうせう」

と、取付き嘆くを取つて突退け

「エヽめろ〳〵とほえ面、コリヤ勘平が武士はすたつたわやい。もうこれまで」

と、刀の柄。

「コレ待つて下され。こりやうろたへてか勘平殿」

「オヽうろたへた。これがうろたへずに居られやうか。主人一生懸命の場にも在り合わさず、あまつさへ同然の網乗物お屋敷は閉門、その家来は色に耽りお供にはづれしと人中へ、両脇差し出られうか。こゝ放せ」

「マア〳〵待つて下さんせ、マア〳〵待つて下さんせイナア。もつともじや道理ぢやが、その武士には誰がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢやと誉めまする。こゝをとつくりと聞き分けて、私が親里へひとまづ来て下さんせ。父様も母様も在所でこそあれ頼もしい人、もうかうなつた因果ぢやと思うて女房の言ふ事も聞いて下され勘平殿」

と、わつとばかりに泣き沈む。

「さうぢやもつともそちは新参なれば、委細の事は得知るまい。お家の執権大星由良助殿、今だ本国より帰られず、帰国を待つてお詫びせん。サア一時なりとも急がん」

と、身拵へするその所へ 鷺坂伴内、家来引連れ駆出で

「ヤア勘平。うぬが主人の塩谷判官おらが旦那の師直様と何か知らぬが殿中において、あつちやの方でぼつちやくちや、こつちの方でべつちやくちや、ちやつちやくちや〳〵咄しのうち、小さ刀をちよつと抜いてちよつと切つた科によつて、屋敷は閉門網乗物にてエツサツサ〳〵、エツサツサ〳〵、エツサツサとぼつ帰した。追付首がころりと飛ぶは知れたこと。サア腕回せ連れ帰つてなぶり切り、覚悟ひろげ」

と、ひしめけば

「よい所へ鷺坂伴内。おのれ一羽で食足らねど勘平が腕の細ねぶか、料理食うて見よ」

「ヤア物は言はすな家来ども」

「畏つた」

と、両方より

「取つた」

と、かゝるを

「まつかせ」

と、かいくゞり、両手に両腕ぢ上げ、はつし〳〵と蹴返せば、代つて切込む切先を、刀の鞘にて丁ど受け、廻つて来るをとにてのっけにそらし、四人一緒に切りかゝるを、右と左へ一時に、でんがく返しにばた〳〵〳〵と打据へられ、皆ちりぢりに行く後へ、伴内いらつて切りかゝる、引ぱづしてそつ首握り、大地へどうともんどり打たせ、しつかと踏付け

「サアどうしようこうしようととこつちのまゝ。突かうか切らうかなぶり殺し」

と、振上ぐる刀に、すがつて

「アヽコレ〳〵そいつ殺すとお詫びの邪魔。もうよいわいな」

と留める間に、足の下をこそ〳〵こっそこそ、尻に尾のない鷺坂は頭はあるかと振つてみて、

「あるとも〳〵大丈夫」

命からがら逃げて行く。

「エヽ残念々々、さりながらきゃつをばらさば不忠の不忠。ひとまず夫婦が身を隠し、時節を待つて願うて見ん」

もはや明六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛ぶ烏かはい〳〵の連れ、道は急げど後へ引く、主人の御身いかがと案じ行くこそ

**《六段目》身売りの段**

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、結ふに言はれぬ身の上を、誰にかの水櫛に、髪の色艶梳き返し、品よくしやんと結ひ立てしは、在所に惜しき姿なり。母のも杖つきの、野道とぼとぼ立ち帰り、

「オヽ娘、髪結ひやつたか。美しうよう出来た。イヤもう、在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も藪隙で若い衆が麦かつ歌に、『親父出て見やばゝん連れて』と唄ふを聞き、親父殿の遅いが気に掛り、在口まで行たれど、ようなう影も形も見えぬ」

「サイナ、こりやまあどうして遅い事ぢや。わし、一走り見て来やんしよ」

「イヤノウ、若い女子一人歩くは要らぬ事。殊にそなたは小さい時から在所を歩くことさへ嫌ひで、塩谷様へ御奉公にやつたれど、どうでも草深い処に縁があるやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬ」

「オヽかゝ様のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの、在所はおろかどんな貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて盆になつて、『とさま出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたつた二人、踊り見に行きやんしよ。かゝさん、お前も若い時覚えがあろ」

と、差し合ひくらぬぐわら娘、気もわさわさと見えにける。

「イヤノウ、なんぼその様に面白をかしう言やつても、心の中はの」

「イエイエ、済んでござんす。主のために祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄つて父さんの世話やかしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど兄も塩谷様の御家来なれば、外の世話する様にもない」

と親子話の中道伝ひ。駕籠を舁かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

「エヽコウツト、確かこの松の木から、一軒、二軒、三軒目。オヽこゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば、

「これは〳〵遠い処を、ソレ娘、煙草盆、お茶あげましや」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主、

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エヽ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬか。ハテ面妖な。ハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、この中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打つた。これの親父が言はるゝには『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晩証文を認め、百両のお貸しなされて下され』と涙をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き換への契約。何がその五十両渡すとの、喜んで戴き、ほたほた言ふて戻られたはもう、四つでもあらうかい。夜道を一人金持つてゐらぬものと、留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せきと戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「イヤイノ、コレ〳〵合点のいくいかぬはそつちの。こつちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去の」

と、懐より金取り出だし、

「跡金の五十両、これで都合百両。サア渡す、受取らしやれ」

「お前、それでも親父殿の戻られぬ中は、のうかる、わが身はやられぬ」

「ハテぐづぐづ〳〵と埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつとも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわいの、これ証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へばれこづゝ違ふ。どうでかうせざ済むまい」

と手を取つて引立つる、

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け、無体に駕寵へ押し込み押し込み、舁きあぐる門の口。鉄砲に蓑笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り、

「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」

「オヽ勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず、

「どうでも深い訳があろ。母者人、女房ども、様子聞かう」

とお上の真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハヽア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。いやも、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、親父の印形あるからは、こちには構はぬ。早う奉公人を受取らうかい」

「オヽ婿殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調へて進ぜたいと、言ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親父どのの言はしやるには、ひよつとこなたの気に、女房売つて金調へ様と、よもや思ふてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売らう、まさかの時は切取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調へておましたら満更腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極はめに往て、今に房らしやれぬ故親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、昨夜親父殿に半金渡し跡金の五十両と引き換へに、娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上と訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるところ、どうせうぞ、勘平殿」

「ハヽ、これはこれは、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがこちにもちつとよい事があれども、マアそれは追つて。親父殿も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とはまた何故に、とは何故に」

「ハテ、いはゞ親なり判がゝり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「アヽこれいのこれ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言ふて済むものかいの、コレ済むかいの。まだその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭にくるくると巻いて懐に入れらるゝ。『アヽそりや危ない危ない〳〵。これに入れて首に掛けさつしやれ』と、俺が着てゐる、コ、ココ、このの縞の切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう」

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オヽてや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハツ』と勘平が肝先にひしと堪へ、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞。『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは舅であつたか、ハア、ハツ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ、とは知らずして女房、

「コレこちの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいか」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「アヽイヤイヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばつかり」

と言ふに文字も図に乗つて、

「それを見みいなどうどすえ。七度尋ねて人疑へぢや。親父の在り所の知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともにでんど沙汰。マアマアさらりと済んでめでたい、めでたい、ハヽヽヽヽ。お袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サアサアお娘、早ふ駕籠に乗りや〳〵」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、どうでこなさんの皆世話。取り分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ、『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と、心を痛め堪へ居る。

「オヽ婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であらう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、悲しうもなんともない。わしや勇んで行く、母さん、したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オヽ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てたも、ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ、ヤ、ヤ。鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。ソレとばついて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

「なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る事ぢや」

と、歯を食いしばり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返る。情なくも駕籠舁き上げ、道を

**《六段目》勘平腹切の段**

知つたる折こそあれ。

深編笠の侍二人、

「早野勘平在宿をし召さるゝか、原郷右衛門、千崎弥五郎、御意得たし」

と訪へば、折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ、

「これは〳〵御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、忝なし」

と、頭を下ぐれば郷右衛門、

「見れば家内に取り込みもあるさうな」

「アヽイヤ、もう些細な内証事。御構ひなくともいざまづあれへ」

「然らば左様に致さん」

と、ずつと通り座に着けば。二人が前に両手を付き、

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒が科御許しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成し、へに頼み奉る」

と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず、

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子は封の儘相戻さるゝ」

と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば、『ハツ』とばかりに気も、母は涙と諸共に、

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、アヽアレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てゝ下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きゐたる。聞くに驚き両人刀追つ取つてに詰め掛け〳〵、弥五郎声を荒らげ、

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよとは言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」

と、はつたと睨めば郷右衛門、

「渇しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハヽ天晴れ〳〵。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こな〳〵、こな〳〵〳〵、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て、

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、両人共にまづ、まづ、まづ〳〵〳〵聞いてたべ。夜前弥五郎殿の御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越すに出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。薬はなきかと懐中を探し見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄する事なす事、いすかの程違ふといふも、武運に尽きたる勘平が、身の成り行き推量あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』と疵口改め、

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀でつた疵。勘平早まりし」

と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりなり。郷右衛門心付き、

「イヤコレ千崎殿、アヽこれにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘当したる悪党者。身のみなき故に、山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたはが」

「エヽ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者でござりますか。ハア」

『ハツ』と母は手負に縋り、

「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで下さるな」

と泣き詫ぶれば、顔振り上げ、

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と、突込む刀引廻せば、

「アヽ暫く〳〵。思はずもその方が舅の敵討つたるは、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、密かに見する物あり」

と、懐中より一巻を取り出だし、さら〳〵と押し開き、

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」

と、読みも終らず苦痛の勘平、

「シテその姓名は、誰々なるぞや」

「オヽ徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し、

「勘平、血判」

「オヽ心得たり」

と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し、「サ血判、仕つた」

「アヽコリヤ乗るな〳〵。早野勘平繁氏、血判確かに相済んだぞ」

「チエヽ忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし。

「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思うて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オヽ成程、尤もなり」

と、郷右衛門金取り納め、

「思へば思へばこの金は、縞の財布の黄金、仏果を得よ」

と言ひければ、

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ〳〵。魂魄この土に留まつて、敵討ちの御供する」

と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と両人が、浮む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにけり。

「ヤア、ヤア〳〵、もう婿殿は死なしやつたか。さても〳〵世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きてゐられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて、

「アヽコレ婿殿、母も共に」

と、縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立ち上がり、

「これ〳〵老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は、婿と舅の。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば〳〵」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり。

**《七段目》一力茶屋の段**

折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔ひ醒まし、早馴れて吹く風に、憂さを晴らしてゐる所へ

「ちよと往て来るぞや。由良助ともあらう侍が、大事の刀を忘れて置いた。つい取つて来るその間に、掛物も掛け直し、炉の炭もついで置きや。アヽそれ〳〵〳〵、こちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太はもふ去なれたさうな」

あたり見廻し由良助、釣燈篭の明りを照らし、読むは御台より敵の様子細々と、女の文の後や先、参らせ候ではかどらず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見下ろせど、夜目遠目なりもおぼろ、思ひ付いたる延べ鏡、出して写して読み取る文章、神ならず、ほどけかゝりしおかるが簪、バツタリ落つれば、下には『ハツ』と見上げて後へ隠す文、上には鏡の影隠し

「由良さんか」

「おかるか。そもじはそこに何してぞ」

「わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに酔ひ醒まし。風に吹かれてゐるわいな」

「ムウ、ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる、ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは言はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか」

「話したいとは、頼みたい事かえ」

「マアそんなもの」

「廻つて来やんしよ」

「イヤイヤ、段梯子へ下りたらば、仲居が見つけて酒にせう。アヽどうせうな。アヽコレコレ、幸ひこゝに九つ梯子、これを踏まへて下りてたも」

と、小屋根に掛ければ

「この梯子は勝手が違うて、オヽ恐。どうやらこれは危いもの」

「大事ない、〳〵。危ない恐いは昔の事、三間づゝまたげても赤膏薬も要らぬ年配」

「阿呆言はんすな。船に乗つた様で恐いわいな」

「道理で、船玉様が見える」

「ヲヽ覗かんすないな」

「洞庭の秋の月様を、拝み奉るぢや」

「イヤモウ、そんなら降りやせぬぞえ」

「降りざ降ろしてやろ」

「アレまだ悪い事をアレアレ」

「しい、生娘か何ぞの様に、逆縁ながら」

と後より、ぢつと抱きしめ、抱き降ろし。

「何とそもじは、御覧じたか」

「アイ、いいえ」

「見たであろ、〳〵」

「何ぢややら面白さうな文」

「アノ、上から皆読んだか」

「オヽくど」

「アヽ身の上の大事とこそはなりにけり」

「何の事ぢやぞいな」

「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつてたもらぬか」

「おかんせ、嘘ぢや」

「サ、嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や、〳〵」

「イヤ、言ふまい」

「なぜ」

「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た、皆嘘」

「おかる、請け出さう」

「エヽ」

「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」

「イヤアノ、わしには」

「間夫があるなら添はしてやろ」

「そりやマアほんかえ」

「侍冥利。三日なりと囲うたら、それからは勝手次第」

「ハア嬉しうござんす、と言はして置いて笑おでの」

「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間にさせう。気遣ひせずと待つてゐや」

「そんなら必ず待つてゐるぞえ」

「金渡して来る間、どつちへも行きやるな。女房ぢやぞ」

「それもたつた三日」

「それ合点」

「エヽ忝うござんす」

「どりや、金渡して来うか」

「アヽ騒ぐは〳〵。さすがは花の祇園町、テモにぎわしいこつたなあ。アヽなんとやら、入相の鐘は廓の夜明けかな、とはよく言つたものだなアハヽヽヽヽ。それはさうとどうぞ首尾よう妹に逢ひたいもんだが、幸ひの女中、ちょと物が尋ねたい。この郭に山崎辺からかるといふ女が勤めに来て居る筈だが、御存知ならちょつと教えてくれねえか」

「エヽ何ぢや知らぬが用があるなら勝手へ往て問うたがよいわいな」

「サア、さうは思つたが、勝手も何かゴタゴタと忙しさうだ。コレどうぞさう言はずと、御存知ならどうか教えてくれろ」

「エヽ知らぬわいな」

「これはしたり、すげねえ女だな、マアさう言はずとちよつと教えてくれろ、御女中、どうか教えてくれろ、わりや妹でねえか」

「エヽお前は兄様、恥しい所で逢ひました」

と、顔を隠せば

「苦しうない、〳〵。関東よりの戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。お夫の為、主の為、よく売られた。でかした〳〵〳〵ナア」

「さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しい。したがまあ喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」

「それは重畳。シテ何人のお世話で」

「お前も御存知の大星由良助様のお世話で」

「何ぢや、由良助殿に請け出される。それは下地からの馴染みか」

「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やろと、モ結構過ぎた身請け」

「さてはその方を早野勘平が女房と」

「イエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」

「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存なねえに極まつたな」

「イエ〳〵、これ兄様、あるぞへ、〳〵」

「あるとは何が」

「サア、高うは言はれぬ。コレ、かう〳〵」

と、囁けば

「待て、〳〵〳〵〳〵ソーレ」

「ムウ、すりやその文確かに見たな」

「残らず読んだその後で、互ひに見合はす顔と顔。それからぢやらつき出して、つい身請けの相談」

「アノ、その文残らず読んだ後で」

「アイナ」

「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身どもにくれよ」

と、抜き打ちに、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、

「コレ兄様、わしには何誤り。勘平といふ夫もあり、きつと二親あるからは、こな様のままにもなるまい。請け出されて親夫に、逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、許して下んせ、許して」

と、手を合はすれば平右衛門、抜身を捨てゝ、

「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿は六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」

「ヤア、それはマア」

「コリヤ、びつくりするな、びつくりするな。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」

「兄さん、勘平さんは」

「その勘平は」

「勘平さんは」

「勘平は、勘平で、やつぱり勘平だわい」

「コレ兄さん、勘平さんにはよい女房さんでも出来たのかえ」

「エヽイ、そんな陽気な事ちやねえわい」

「そんなら兄さん、どうさしゃんしたえ」

「その勘平はな、腹を切つて死んだわやい」

「エヽ、〳〵」

「アヽ驚きは尤も、道理だ〳〵。ガこれには、何だ、様子のある、アヽしまつた、コリヤ妹が目を廻した、てつきりさうであらふと思ふた。誰かいねえか、誰か水を持つて来てくれろ。待てのるな、のるな。幸いの手水鉢、アヽ今水をくれるぞ。ソリヤ水だ。おかるやい、妹やい、気が付いたか、〳〵」

「オヽお前は兄さん」

「オヽ兄だ、平右衛門だ、面を見ろ〳〵」

「コレ兄さん、勘平さんはどうさしやんしたえ」

「エヽ情けねえ、又尋ねるのかやい。その勘平はな、友朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」

「ヤア〳〵〳〵それはマアほんかいな。コレのうのう」

と、取り付いて

「コレ兄さんどうせう」

「道理だ」

「どうせう」

「道理だ」

「どうせうどうせう、〳〵ぞいなあ」

「オヽ道理だ〳〵。様子話せば長い事、お痛はしいは母者人、言ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣き死にするであろ、必ず言つてくれなとのお頼み。言ふまいとは思へども、とても遁れぬそちが命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、請け出だして刺し殺す思案の底と確かに見えた。よしさうのうても壁に耳、他より洩れてもその方が、密書を覗き見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手に掛けよりわが手に掛け、大事を知つたる女、妹とて許されずと、それを功に連判の、数に入つてお供に立たん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば数には入れられぬ。聞き分けて命をくれ、死んでくれ、妹」

と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ、せき上げ

「便りのないは身のを、役に立てゝの旅立ちか、暇乞ひにも見へそなものと、恨んでばつかりをりました。勿体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平さんは〳〵三十になるやならずに死ぬるのは、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、何故逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、何の生きてをりませう。お手に掛からば母さんがお前をお恨みなされましよ。自害したその後で、首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらばでござる兄さん」

と、言ひつゝ刀取り上ぐる

「ヤレ待て暫し」

と止むる人は由良助、『ハツ』と驚く平右衛門、おかるは

「放して殺して」

と、焦るを押へて、

「ホウ、兄妹とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を許す。ソレ平右衛門、喰らひ酔うたその客に、加茂川でナ」

「いかゞ計らひませうか」

「水雑炊を喰らはせい」

「ハヽア」

「行け」

「ヤ、シテコイナ」